

カフカを読む

奈良敏行



十月十日(二〇二四)は「交流ポラーナ」で「カフカ」についての話があった。町の中のわたしの拠点の定有堂ビルから歩いて五分、三五〇メートル離れた字びのサロンだ。

講師は詩人の井上嘉明さんだった。前回に引き続いての後編だった。前回の終わりにわたしは「詩を書くこととカフカはどんな関係があるんですか…」と質問した。答えは「世界が不条理だから」という回答だった。

一通り説明があった後で、わたしの問いの「不条理」について再度触れて下さった。不条理とはつじつまの合わないこと。そして辻褄というのは、「辻」は裁縫で編み目が十文字に合うところ、「褌」は着物の左右が合うところ、合うべき所がきちんと合うはずの物事の道理のことだと教えてくれた(『日本国語辞典』)。「合わない」と支離滅裂だよ」と語った。なるほど「つじつまの合わない」感覚が入口なんだと思った。

質疑応答もあり、わたしは「なぜこの場にいるのか」と

いう理由を説明した。自己紹介だ。少し恥ずかしくはあったが率直に「道を求め、さとり(気づき)を得るため」と小さな声で言った。そして「さとり」はわたしの場合いつも言葉という形で訪れる。詩人の思索には言葉の深みがあるので、耳を傾けここにいますと告げた。

今日受け止めた言葉は三つあった。一つは「実存は本質に先行する」というサルトルの有名な言葉だった。年若いていまここでこの言葉に出合うのは驚きだった。青年時代にこと言葉に出合って、その後思想の変遷で記憶が薄れていた。思索は簡単な方がいい。この「簡単さ」に驚いた。その後構造主義とかポストモダンの思想に出合うが、文化人類学的にいえば、「本質」とは「設計(エンジンニアリング)」であり、「実存」とは「ブリコラージュ」ではないか。ドゥルーズ的にいえば、「本質」は「規範」であり「実存」は「逸脱」だ。循環構造の中で、加上説的な積み重ねが剥離して物事が簡単になる。年をとると荷物は軽いほどがいい。

二つ目は、なぜ詩を書くかということだった。詩を書く動機だ。それは「抽象性」をいかに処理するか、ということだった。抽象の反対は具体だ。つじつまの合わない事象が人を苦しめる。なぜならそれは地べたの摂理とかけ離れた抽象のしめつけとして人を支配する。具体的なことがら

は人が長い年月の間に慣習として鍛え上げた知恵に包まれている。この具体性を取り戻すひとつの手段が「詩」をつくることだろうか、と解釈した。

三つ目は似たようなことがらだが、社会と個人のつじつまが合わない中で、自分なりの武器を持ちたいということだった。言葉を礫(つぶて)とする考えはわたしも同感するところだ。先の抽象性をいかに処理するか、という課題は語れば一時間を要する人生の核心だと受けとめた。

会場から詩人の漆原正雄さんが「我思う故に我あり」という言葉を転倒させ「我ある故に我思う」と入れ替えたらどうだろうと発言した。身体性の確保された詩人の日頃の気づきだと感心した。抽象性を砕く言葉を生きる人がここにもいると思った。

先日漆原さんは一編の詩を送ってくれた。「身の丈にふれる」というタイトルの詩だ。わたしが「身の丈」という言葉にオブセッションを重ねるのを知っていて、その抽象性を解き放ってくれていた。

《もしかしたら、わたしがここにいて、ということがなにもにもかえがたい感触を得られるときこそ、／そういつたときこそはじめてわたしは、このわたしを抱きしめられるのではないか》

わたしを覚醒に導く言葉がここにもあった。

友人の浜田浩之さんは、不条理とダブルバインドとはどういう関係があるだろうと言った。浜田さんは「ダブルバインド」をキーワードとして考えつけてきた人だ。この場ではすぐに答えられる人はいなかった。当日の資料に「不条理は認められ、受け入れられ、人はそれに身をまかせる。そうなるやいなや、それはもはや不条理ではないことを、われわれは知る」と解説するものがあつた。『実存主義辞典』東京堂出版。ダブルバインドに解決はない。外部に出るほか解決はない。不条理はどうなのだろう。不条理の中で人は「身をまかせる」ことを受け入れる。カフカの世界だ。

井上さんの話の入口は「不条理」だった。出口は『断食芸人』にあつた。そこで主人公は「おれに合う食べものがなかったから食べなかった」と告白する。詩人は無用の人だ。無用に生きてきた理由をそのように説明したのだと思つた。

そして結論であるようなないような言葉を小さな声でつぶやいた。「もみじは落ちる瞬間にひとときわ紅くなる」、そして「ホントかな？」と微笑んだ。そのように思いたいのは詩人のオブセッションだ。美しいと思つた。

2024.10.11